

血液製剤に関する報告事項について (目次)

- 輸血用血液製剤で HIV 感染が疑われた事例について 3
- 輸血用血液製剤で HBV(B 型肝炎ウイルス)感染が疑われた事例(平成 16 年 3 月 22 日報告)について 4
- 輸血用血液製剤で HBV(B 型肝炎ウイルス)感染が疑われた事例(平成 16 年 11 月 26 日報告)について 5
- 輸血用血液製剤で HBV(B 型肝炎ウイルス)感染が疑われた事例(平成 17 年 1 月 12 日報告)について 7
- 輸血用血液製剤で HBV(B 型肝炎ウイルス)感染が疑われた事例(平成 17 年 2 月 4 日報告)について 9
- 輸血用血液製剤で HBV(B 型肝炎ウイルス)感染が疑われた事例(平成 17 年 6 月 23 日報告)について 11
- 輸血用血液製剤で HBV(B 型肝炎ウイルス)感染が疑われた事例(平成 18 年 4 月 7 日報告)について 12
- 輸血用血液製剤で HBV(B 型肝炎ウイルス)感染が疑われた事例(平成 18 年 6 月 5 日報告)について 13
- 輸血用血液製剤で HBV(B 型肝炎ウイルス)感染が疑われた事例(平成 19 年 2 月 20 日報告)について 14
- 輸血用血液製剤で HBV(B 型肝炎ウイルス)感染が疑われた事例(平成 20 年 1 月 23 日報告)について 15
- 輸血用血液製剤で HBV(B 型肝炎ウイルス)感染が疑われた事例(平成 20 年 2 月 8 日報告)について 17
- 輸血用血液製剤で HBV(B 型肝炎ウイルス)感染が疑われた事例(平成 20 年 5 月 14 日報告)について 19
- 輸血用血液製剤で HCV(C 型肝炎ウイルス)感染が疑われた事例(平成 18 年 2 月 15 日報告)について 20

● 輸血用血液製剤で細菌感染が疑われた 事例(平成20年6月5日報告)について	22
※●は今回の新規症例	

○ 平成20年度感染症報告事例のまとめ (平成20年5月報告分以降)について	23
○ 輸血後HEV感染の予防対策(問診・NATの状況)	29

< 参 考 >

・ 血液製剤に関する報告事項について (平成20年6月25日付け血液対策課事務連絡)	34
・ 血液製剤に関する報告事項について(回答) (平成20年6月27日付け日本赤十字社提出資料)	36
・(参考)安全対策業務の流れ	44

輸血用血液製剤で HIV 感染が疑われる事例について

1. 経緯等

平成15年9月5日、後天性免疫不全症候群発生届にて感染経路として輸血が考えられる HIV 感染者が報告されたとの情報を入手。同日、当該報告医が、同事例について副作用感染症報告を日本赤十字社に提出、これを受けて同社による調査が開始され、その結果が、平成15年10月30日に開催された第95回エイズ動向委員会（委員長：吉倉廣国立感染症研究所長）に報告された。

2. 事 例

50歳代の男性で平成15年の3月～7月に赤血球製剤（MAP16単位）の輸血を受けた後、実施した血液検査においてHIV感染を確認（WB検査陽性）。報告医は感染経路として輸血を疑っている。

3. 事実関係

1) 輸血された輸血用血液製剤について

- ・当該感染者には、8人の供血者から採血された赤血球製剤（MAP）が8本（保管検体の個別NATはいずれも陰性）投与された。

2) 他の血液製剤への影響について

- ・投与された赤血球製剤の原料血液からは、他に新鮮凍結血漿と血漿分画製剤用の原料血漿が製造されていた。
- ・原料血漿については流通を停止。
- ・新鮮凍結血漿については3本が製造されており、既に他の医療機関で3名の患者に投与されていた。（他に行方不明の製剤はない。）

3) 新鮮凍結血漿の投与を受けた3名について

- ・1名は既に原疾患により死亡
- ・残り2名については輸血後（約6ヵ月後）の抗体検査で陰性。

4. エイズ動向委員会での専門家からの意見

記者会見では、「HIVの感染が輸血用血液製剤によるか追求すれば、患者のプライバシーに関わりうるケースである。」との発言があった。

5. エイズ動向委員会後の事実経過

1) 健康状態の確認を行っていた2名の受血者は、いずれも感染していなかったことが確認された。

2) 供血者の次回献血での検査については、8名中6名が来訪し、感染していなかったことが確認された（平成20年6月27日現在、残る2名のその後来所なし）。

6. 今後の対応

当該感染者のプライバシーの最大限尊重を徹底しつつ、引き続き調査を継続するよう指導してまいりたい。

輸血用血液製剤で HBV（B 型肝炎ウイルス）感染が疑われた事例 （3 月 2 2 日報告）について

1 経緯

平成 1 6 年 3 月 2 2 日及び 3 0 日、日本赤十字社から輸血（人血小板濃厚液及び人赤血球濃厚液）による HBV 感染の疑い事例の報告があった。

2 事例

7 0 歳代の女性。原疾患は急性骨髄性白血病。平成 1 5 年 1 0 月 5 日～平成 1 6 年 1 月 2 2 日の間に、輸血を計 1 8 回（人血小板濃厚液 1 0 単位を 1 1 袋分並びに人赤血球濃厚液 1 単位を 3 袋分及び 2 単位を 4 袋分）受ける。

輸血前の血液検査（平成 1 5 年 1 0 月 3 日）では HBs 抗原及び抗体検査（B 型肝炎ウイルスの検査）はいずれも陰性であったが、輸血後の平成 1 6 年 3 月 1 9 日に実施した HBs 抗原検査は陽性、肝機能検査（GOT、GPT 及び LDH）は高値を示す。

患者は 4 月 2 6 日に死亡したことを確認済み。死因は呼吸不全及び腎不全。

3 状況

（1）輸血された血液製剤について

- 当該患者には、3 7 人の供血者から採血された血小板製剤及び赤血球製剤を輸血。
- 当該製剤に関わる血漿のうち、4 人分由来の 5 本が新鮮凍結血漿（FFP）として医療機関へ供給された（残りは原料血漿）。

（2）3 7 人の供血者について

3 7 人の供血者のうち、3 2 人の献血者がその後献血しており、検査は陰性であった。（平成 2 0 年 6 月 2 7 日現在、残る 5 人のその後の来所なし）。

（3）供血者の個別 NAT の試験結果

供血者 3 7 人の保管検体について、個別 NAT を実施したところ、全て陰性であった。

（4）患者の保管検体の個別 NAT 及び HB s 抗原の試験結果

平成 1 6 年 3 月 1 9 日（輸血後）の医療機関に保管されていた患者検体は個別 NAT 及び HB s 抗原検査はいずれも陽性（輸血前は保管されていなかった）。

（5）輸血と HBV 感染との関連

現在のところ、輸血と HBV 感染（当該事例の死亡原因を含む）の因果関係については不明。

4 今後の対応

（1）当該事例への対応

- 医療機関へ供給した 5 本の新鮮凍結血漿に関して情報提供した医療機関における受血者（患者）5 名の健康状態を確認した結果、輸血後陰性が 2 名、不明が 3 名であった。
- 3 7 人の供血者のうち、その後献血に来ていない 5 人のフォローを行う。

（2）血液の安全対策の推進

「輸血医療の安全確保のための総合対策」を着実に実施する。

輸血用血液製剤でHBV（B型肝炎ウイルス）感染が疑われた事例 （11月26日報告）について

1. 経緯

平成16年11月26日、日本赤十字社から輸血（新鮮凍結血漿）によるHBV感染の疑い事例で患者が死亡した症例の報告があった。

2. 事例

70歳代の男性。原疾患は消化器腫瘍（転移性肝癌を含む。）。平成16年3月12日から15日まで4日間に亘り、プロトロンビン時間延長のため、輸血を（新鮮凍結血漿合計36単位23本）受ける。

輸血前の血液検査（2月28日）では、HBs抗原検査陰性であったが、平成16年10月4日に肝機能検査値異常がみとめられ、黄疸を呈したため、10月8日に検査したところ、HBs抗原陽性、HBs抗体陰性が確認され、急性B型肝炎と診断された。11月17日に右大量胸水を呈した後、呼吸状態悪化により死亡した。また、平成15年5月の手術の際にも新鮮凍結血漿2単位22本、赤血球MAP2単位3本の輸血を受けている。

3. 状況

(1) 輸血された血液製剤について

- ① 当該患者には平成16年3月の輸血時に23人の供血者から採血された新鮮凍結血漿を輸血。また、平成15年5月に25人の供血者から採血された新鮮凍結血漿及び赤血球MAPを輸血。
- ② 平成16年3月輸血の供血者と同一の供血者に由来し、同時に製造された原料血漿は2本が確保、10本は使用済み、新鮮凍結血漿10本及び赤血球MAP23本は全て医療機関に提供済み。
- ③ 平成15年5月輸血の供血者と同一の供血者に由来し、同時に製造された原料血漿21本は使用済み、新鮮凍結血漿6本及び赤血球MAP22本は全て医療機関に提供済み。

(2) 48人の供血者について

- ① 平成16年3月の輸血時の供血者23人のうち、19人が再献血し、再献血時の検査結果は18人がHBV関連検査陰性、1人はHBc抗体はEIA法陽性、HI法陰性、HBs抗体（EIA法）陽性（NAT及びHBs抗原陰性）であった。なお、この1人の献血時のHBc抗体はEIA法で陽性、HBs抗体も陽性であった（平成20年6月27日現在、残る4人のその後の来所なし）。
- ② 平成15年5月の輸血時の供血者25人のうち、21人が再献血し、再献血時の検査結果はHBV関連検査陰性であった（平成20年6月27日現在、残る4人のその後の来所なし）。

(3) 供血者個別NATの試験結果

- ① 平成16年3月の輸血時の供血者23人の供血時の保管検体について、個別NATを実施したところ、すべて陰性であった。
- ② 平成15年3月の輸血時の供血者25人の供血時の保管検体について、個別NATを実施したところ、すべて陰性であった。

4. 今後の対応

- (1) 供血者48人のうち、8人の再献血・検査に係るフォローを行う。

(2) 血液の安全対策の推進

「輸血医療の安全確保のための総合対策」を着実に実施する。

(3) その他

- ① 受血者の輸血後検体(10月12日)を確保し、再検査したところ、HBs 抗原 (+)、HBs 抗体 (-)、HBc 抗体 (+)、HBV-DNA (+)であった。
- ② 受血者の肝臓については、平成15年に施術され、平成16年10月の腹部CTでは再発が認められておらず、肝臓と肝障害との因果関係はないものと考えられる。

輸血用血液製剤でHBV（B型肝炎ウイルス）感染が疑われた事例 （1月12日報告）について

1 経緯

平成17年1月12日、日本赤十字社から輸血（赤血球濃厚液、血小板濃厚液）によるHBV感染の疑い事例で患者が死亡した症例の報告があった。

2 事例

60歳代の男性。原疾患は血液疾患。平成16年1月8日から5月25日まで12回にわたり、輸血（赤血球濃厚液合計26単位、血小板濃厚液合計30単位）を受ける。

輸血前の血液検査（1月8日）では、HBs抗原検査陰性であったが、平成16年11月18日に食欲不振のため、検査したところ、HBs抗原陽性が確認され、同22日の採血の検体で、HBs抗原（+）、HBs抗体（-）、HBc抗体（+）、HBV-DNAのNATの（+）も確認された。平成17年1月8日劇症肝炎を呈した後、肝不全により死亡した。

3 状況

(1) 輸血された血液製剤について

- ① 当該患者には16人の供血者から採血された赤血球濃厚液及び血小板濃厚液を輸血。
- ② 輸血の供血者と同一の供血者に由来し、同時に製造された原料血漿は3本が確保、12本は使用済み、新鮮凍結血漿12本は全て医療機関に提供済み。

(2) 16人の供血者について

- ① 輸血時の供血者16人のうち、12人が再献血し、再献血時の検査結果はHBV関連検査（-）であった。（平成20年6月27日現在、残る4人のその後の来所なし）
- ② 供血時保管検体の2人の陽性血から、原料血漿2本、新鮮凍結血漿が2本製造され、原料血漿は使用済み、新鮮凍結血漿も使用済みであった。当該新鮮凍結血漿の受血者2名のうち、1人は輸血後11日目で死亡、もう1人はHBs抗原検査（-）であった。

(3) 供血者個別NATの試験結果

- ① 輸血時の供血者16人の供血時の保管検体について、個別NATを実施したところ、2人がNAT（+）であった。
- ② 当該2人は、共に、複数回再献血を行っているが、再献血時にHBV関連検査（-）であり、HBc抗体及びHBc抗体-IgMは（-）、個別NATも共に（-）であった。
- ③ 当該2名の供血時の保管検体のウイルス解析の結果、共に、ゲノタイプCサブタイプadrと推定、また、497番目と498番目の間に12塩基が挿入した極めて特殊な変異株と挿入のない野生株が存在していた。これらは、受血者の血液も同様に挿入のある変異株と挿入のない野生株を有しており、三者のウイルスのシーケンスは完全に一致した。

4 今後の対応

(1) 血液の安全対策の推進

「輸血医療の安全確保のための総合対策」を着実に実施する。

(2) 輸血時の供血者16人のうち、再献血に訪れていない4人について引き続き、調査

する。

(3) その他

- ① 供血時保管検体でNAT（+）となった2名は、その後の再献血の検査がすべて（-）であり、HBc抗体も（-）であり、感染歴があった可能性は低い。
- ② また、発見されたウイルスのシーケンスは稀なものであり、これらが偶然に保管検体2本一致することは考えにくい。
- ③ 当該供血者の血液から同時に製造された新鮮凍結血漿の受血者で感染は発生していない。
- ④ 以上のことから、NAT時に受血者血液が供血者サンプルに混入する等の測定上の誤差が発生した可能性も考えられる。

輸血用血液製剤でHBV（B型肝炎ウイルス）感染が疑われた事例 （2月4日報告）について

1 経緯

平成17年2月4日、日本赤十字社から輸血（人赤血球濃厚液）によるHBV感染の疑い事例で患者が死亡した症例の報告があった。

2 事例

60歳代の男性。原疾患は悪性腫瘍。平成16年9月8日から11月24日まで、貧血のため、輸血を計9回（人赤血球濃厚液合計14単位）を受ける。

輸血前の血液検査（平成16年8月3日及び9月8日）では、HBs抗原検査陰性であったが（9月8日はHBs抗体及びHBc抗体検査も陰性）、平成16年11月24日の輸血時にHBs抗原検査陽性が確認された（HBs抗体及びHBc抗体検査は陰性）。

平成17年1月26日の輸血施行時に、HBs抗原検査陽性に加え、HBc抗体検査が陽性となり（HBs抗体検査は陰性）、1月31日には黄疸が出現するとともに、肝機能検査で高値を示し、2月2日に劇症肝炎により死亡した。

なお、当該患者の輸血前血液（平成16年9月8日）の保管検体のHBV-NATは陰性で、輸血後血液（平成16年10月21日）はHBV-NATは陽性であった。輸血後血液から検出されたHBVは、ジェノタイプB、サブタイプadw、CP/Pre C領域はe抗原が産生できない変異株であった。HBV-DNA量は 2.9×10^{10} Copies/mLであった。

3 状況

（1）輸血された血液製剤について

- ① 当該患者には9人の供血者から採血された赤血球濃厚液を輸血。
- ② 9人の供血者と同一の供血者に由来し、同時に製造された原料血漿7本及び新鮮凍結血漿2本を確保済み。残りの新鮮凍結血漿2本は医療機関へ供給済みであるが、医療機関への情報提供は実施済み。

（2）9人の供血者について

- ① 供血者9人のうち、当該患者の平成16年10月21日採血の輸血後血液がHBV-NAT陽性であったことから、10月21日輸血以前（9月8日～9月10日）の輸血に係る4人の供血者に対して供血者に呼び出しの協力を依頼し、3人は再献血又は再採血済み。
- ② 10月21日輸血以降の供血者について、2人がその後再採血検査済み。
- ③ ①及び②の計5名については、HBV個別NATを含めHBV関連検査は陰性だった。ただし、①の3名のうち、1名はHBc抗体がEIA法のみ陽性、HI法は陰性だった。（平成20年6月27日現在、残る1名のその後の来所なし。）

（3）供血者個別NATの試験結果

輸血時の供血者9人の供血時の保管検体について、個別NATを実施したところ、すべて陰性であった。

4 今後の対応

（1）9月8日～9月10日輸血の4人の供血者のうち、残る供血者1人の再献血・検査に係るフォローを行う（再採血の依頼中）。

（2）血液の安全対策の推進

「輸血医療の安全確保のための総合対策」を着実に実施する。

(3) その他

悪性腫瘍の治療にプラチナ系抗癌剤等（8月18日）及びテガフル・ギメラシル・オテラシルカリウム（11月10日）を使用しており、薬剤性の劇症肝炎の疑いも完全には否定できない。

輸血用血液製剤で HBV（B 型肝炎ウイルス）感染が疑われた事例 （6月23日報告）について

1 経緯

平成 17 年 6 月 23 日、日本赤十字社から輸血（赤血球濃厚液及び新鮮凍結血漿）による HBV 感染の疑い事例で患者が死亡した症例の報告があった。

2 事例

50 歳代の男性。原疾患は消化管腫瘍。平成 17 年 2 月 3 日に手術施行のため、赤血球濃厚液合計 8 単位、新鮮凍結血漿合計 30 単位を受ける。

輸血前の血液検査（平成 16 年 12 月）では HBs 抗原検査陰性、輸血後の平成 17 年 4 月 6 日でも HBs 抗原検査陰性であったが、退院時の平成 17 年 4 月 21 日に HBs 抗原検査陽性が確認された。

その後、平成 17 年 6 月 13 日に発熱、全身倦怠感等出現し、肝機能値が高値を示し、6 月 16 日再入院、6 月 20 日には、HBs 抗体、HBc 抗体、HBe 抗原、HBe 抗体のいずれも陽性が確認された。また、同日の HBc の IgM 抗体も陽性であり、劇症肝炎と診断される。

患者は、7 月 3 日に B 型劇症肝炎にて死亡した。

患者の検体の HBV の解析結果は、ジェノタイプ C、サブタイプ a d r であり、CP/Pre Core 領域の塩基配列の解析から PreC 部位には変異はなく、CP（Core Promoter）部位に変異がある CP 変異、PreC 野生株であった。

3 状況

（1）輸血された血液製剤について

① 当該患者には 20 人の供血者から採血された赤血球濃厚液等を輸血。

② 20 人の供血者と同一の供血者に由来し、同時に製造された原料血漿は 17 本のうち 10 本が確保、新鮮凍結血漿 6 本のうち 3 本は確保済み。15 本の赤血球濃厚液はすべて医療機関へ供給済み。医療機関への情報提供は実施済み。

（2）20 人の供血者について

供血者 20 人のうち、15 人が再採血・献血に来場（HBV 関連検査は陰性）。（平成 20 年 6 月 27 日現在、残る 5 名の来訪なし。）

（3）供血者個別 NAT の試験結果

輸血時の供血者 20 人の供血時の保管検体について、個別 NAT を実施したところ、すべて陰性であった。

4 今後の対応

（1）供血者 5 人の再献血・検査に係るフォローを行う（再採血の依頼中）。

（2）血液の安全対策の推進

「輸血医療の安全確保のための総合対策」を着実に実施する。

輸血用血液製剤でHBV（B型肝炎ウイルス）感染が疑われた 事例（4月7日報告）について

1. 経緯

平成18年4月7日、日本赤十字社から輸血（濃厚血小板、赤血球濃厚液）によるHBV感染疑いの症例の報告があったとの報告が、日本赤十字社からあった。

2. 事例

患者は、40代の男性で、原疾患は血液腫瘍。平成16年7月から平成17年2月に（濃厚血小板計30単位、赤血球濃厚液計48単位）、平成17年3月から5月に輸血（濃厚血小板計130単位、赤血球濃厚液計18単位）を受ける。

最初の輸血から8ヶ月後の平成17年2月22日にはHBs抗原、HBs抗体、HBc抗体全て陰性だったが、平成18年3月に肝不全となり、4月3日にHBs抗原、HBc抗体についても陽転が確認された。輸血後の平成17年5月23日の保管検体において、HBV-NATは陰性であったが、6月8日の保管検体において、HBV-NATは陽性であった。なお、HCV抗体は輸血前から陽性であった。

その後主治医は、亜急性劇症肝炎と診断。（4月7日 ALT67IU/mL, T-Bil3.57mg/dL, PT-INR2.30）患者は5月19日に肝不全により死亡。

3. 感染についての状況

(1) 輸血された血液製剤について

- ① 当該患者に投与された血液製剤の供血者数は31人（H16年7月～H17年2月）及び22人（H17年3月～5月）

※被疑製剤の対象をH16年7月まで拡大して調査

- ② 当該供血者と同一の供血者に由来し、同時に製造された原料血漿51本のうち44本使用済みで7本確保済み。新鮮凍結血漿14本はすべて医療機関へ供給済み。

(2) 供血者個別NAT

供血者個別NATは53人分全て陰性。

(3) 供血者に関する情報

- ① 供血者31人のうち、22人が献血又は事後採血に再来し、21人はHBV関連検査陰性。1名はHBs抗体のみ陽性（平成20年6月27日現在、残る9名の来訪なし）。
- ② 供血者22人のうち、22人すべてが献血又は事後採血に再来し、20人はHBV関連検査陰性。2名はHBc抗体及びHBs抗体陽性。

(4) その他

平成17年4月8日、骨髄バンクからの同種骨髄移植を施行。ドナーはHBsAg(-)、HBsAb(-)、HBcAb(-)であった。

4. 今後の対応

- (1) 供血者9人の再献血・検査に係るフォローを行う
(2) 「輸血医療の安全確保のための総合対策」を着実に実施する。

輸血用血液製剤で HBV（B 型肝炎ウイルス）感染が疑われた事例 （6 月 5 日報告）について

1 経緯

平成 18 年 6 月 5 日、日本赤十字社から輸血（赤血球濃厚液及び新鮮凍結血漿）による HBV 感染の疑い事例で患者が死亡した症例の報告があった。

2 事例

80 歳代の男性。原疾患は消化器疾患。平成 17 年 10 月 22 日から 11 月 29 日までの間に赤血球濃厚液合計 18 単位、新鮮凍結血漿合計 36 単位を受ける。

輸血前の血液検査（平成 17 年 8 月 31 日）では HBs 抗原検査陰性、AST 16 及び ALT 12 であった。輸血後の平成 18 年 5 月 2 日に、AST、ALT の上昇がみられ、同月 19 日に HBs 抗原検査陽性であり、AST 683、ALT 693 であった。同患者については、上記の他、次の検体が医療機関に保管されており、それらを検査した結果は次のとおりであった。

輸血前 H17.10.22 HBV-DNA 陰性

輸血後 H17.11.13 HBs 抗原陰性、HBs 抗体陰性、HBc 抗体陰性

輸血後 H17.11.24 HBs 抗原陰性、HBs 抗体 EIA 法陽性／PHA 法陰性、HBc 抗体陰性

輸血後 H17.11.27 HBV-DNA 陰性

輸血後 H18.06.02 HBs 抗原陽性、HBs 抗体陰性、HBc 抗体陽性、HBV-DNA 陽性

その後、平成 18 年 6 月 12 日に死亡。急性肝炎から劇症肝炎に至り、肝不全による死亡と考えるとの担当医の見解である。

3 状況

（1）輸血された血液製剤について

① 当該患者には 29 人の供血者から採血された赤血球濃厚液等を輸血。

② 29 人の供血者と同一の供血者に由来し、同時に製造された原料血漿は 27 本のうち 11 本が確保、16 本が使用済み。新鮮凍結血漿 8 本のうち 6 本は確保済み、2 本は医療機関へ供給済み。18 本の赤血球濃厚液はすべて医療機関へ供給済み。

（2）29 人の供血者について

供血者 29 人のうち、27 人が再採血・献血に来場（27 名の HBV-DNA は全て陰性、そのうち 2 名は HBs 抗体及び HBc 抗体陽性、1 名は HBs 抗体のみ陽性、残る 24 名は HBV 関連検査陰性）。（平成 20 年 6 月 27 日現在、残る 2 名の来訪なし。）

（3）供血者個別 NAT の試験結果

輸血時の供血者 29 人の供血時の保管検体について、個別 NAT を実施したところ、すべて陰性であった。

4 今後の対応

（1）供血者 2 人の再献血・検査に係るフォローを行う（再採血の依頼中）。

（2）血液の安全対策の推進

「輸血医療の安全確保のための総合対策」を着実に実施する。

輸血用血液製剤で HBV（B 型肝炎ウイルス）感染が疑われた事例 （2月20日報告）について

1 経緯

平成19年2月20日、日本赤十字社から輸血（赤血球濃厚液）によるHBV感染の疑い事例で患者が死亡した症例の報告があった。

2 事例

60歳代の男性。原疾患は消化器腫瘍。平成18年8月3日に、輸血（赤血球濃厚液合計4単位3本）を受ける。

輸血前の血液検査（平成18年7月11日）ではHBs抗原検査陰性であったが、輸血後の平成18年9月26日に、HBs抗原検査陽性となった。10月24日の悪心、嘔吐、腹痛にて受診、AST1364、ALT1306、肝不全を認める。10月25日に多臓器不全により死亡。感染経路が不明であるが、輸血によるHBVの感染が否定できないとの担当医の見解である。

3 状況

（1）輸血された血液製剤について

①当該患者には3人の供血者から採血された赤血球濃厚液を輸血。

②当該製剤と同一供血者から製造された3本の原料血漿は全て確保済み。

（2）3人の供血者について

3人の供血者のうち、2名が再採血・献血に来場（2名のHBV関連検査は全て陰性）。（平成20年6月27日現在、残る1名の来訪なし。）

（3）供血者個別 NAT の試験結果

輸血時の供血者3人の供血時の保管検体について、個別 NAT を実施したところ、全て陰性であった。

4 今後の対応

（1）供血者1人の再献血・検査にかかるフォローを行う。

（2）血液の安全対策の推進

「輸血医療の安全確保のための総合対策」を着実に実施する。

輸血用血液製剤でHBV（B型肝炎ウイルス）感染が疑われた事例 （1月23日報告）について

1 経緯

平成20年1月23日、日本赤十字社から輸血（赤血球濃厚液、血小板濃厚液）によるHBV感染の疑い事例で患者が死亡した症例の報告があった。

2 事例

60歳代の男性。原疾患は骨髄異形成症候群。平成19年7月12日から平成19年12月20日にかけて、輸血（赤血球濃厚液合計42単位（2単位21本）、血小板濃厚液合計160単位（10単位16本））を受ける。

輸血前の血液検査（平成19年7月11日）ではHBs抗原検査陰性、HBs抗体検査陰性、HBc抗体検査陰性であったが、輸血後の平成20年1月8日に、HBs抗原検査陽性、HBV-DNA検査陽性となった。原疾患で入院中に輸血を受け、平成19年12月8日に退院。その後、平成20年1月8日に倦怠感、発熱により再度入院、AST3368、ALT2843。1月10日にはAST7674、ALT5030まで上昇、翌日急性B型肝炎にて死亡。輸血と死亡との関連性ありとの担当医の見解である。

3 状況

（1）輸血された血液製剤について

①当該患者には37人の供血者から採血された赤血球濃厚液及び血小板濃厚液を輸血。

②当該製剤と同一供血者から製造された26本の原料血漿、11本の新鮮凍結血漿は全て確保済み。

（2）37人の供血者について

37人の供血者のうち、20名が献血に再来（20名のHBV関連検査は全て陰性、2名はHBs抗体のみ陽性で、当該献血時も同様であった）。（平成20年6月27日現在、残る17名の来訪なし。）

なお、当該患者のHBV-DNAが陽転化する前（平成19年7月12日から10月31日）に輸血に使用された血液の供血者は24名であり、そのうち14名がその後献血に再来（14名のHBV関連検査は全て陰性。2名はHBs抗体のみ陽性であった）。（平成20年6月27日現在、残る10名の来訪なし。）

（3）供血者個別NATの試験結果

輸血時の供血者37人の供血時の保管検体について、個別NATを実施したところ、全て陰性であった。

4 今後の対応

（1）平成19年7月12日から10月31日輸血の24人の供血者のうち、残る供血

者10人の再献血・検査にかかるフォローを行う。

(2) 血液の安全対策の推進

「輸血医療の安全確保のための総合対策」を着実に実施する。

輸血用血液製剤でHBV（B型肝炎ウイルス）感染が疑われた事例 （2月8日報告）について

1 経緯

平成20年2月8日、日本赤十字社から輸血（赤血球濃厚液、血小板濃厚液）によるHBV感染の疑い事例の報告があり、その後3月17日に、患者が死亡したとの報告があった。

2 事例

80歳代の男性。原疾患は急性骨髄性白血病。平成19年6月28日から平成20年2月3日にかけて、輸血（赤血球濃厚液合計78単位（2単位39本）、血小板濃厚液合計670単位（10単位67本））を受ける。

輸血前の血液検査（平成19年6月15日）ではHBs抗原検査陰性、HBc抗体陰性であったが、輸血後の平成20年2月4日に、HBs抗原検査陽性、HBe抗原検査陽性、HBs抗体検査陰性、HBc抗体検査陽性、HBV-DNA検査陽性となった。輸血後の平成20年2月6日にAST221、ALT106となり、3月12日、急性B型肝炎にて死亡。輸血と死亡との関連性ありとの担当医の見解である。

3 状況

（1）輸血された血液製剤について

- ①当該患者には106人の供血者から採血された赤血球濃厚液及び血小板濃厚液を輸血。
- ②当該製剤と同一供血者から製造された95本の原料血漿のうち、93本確保済み（2本使用済み）、11本の新鮮凍結血漿は全て確保済み。

（2）106人の供血者について

106人の供血者のうち、83名が献血（67名）又は再採血（16名）に協力いただいた（83名のHBV-DNAは全て陰性。1人はEIA法でHBs抗原及びHBc抗体陽性、1名はHBs抗体及びHBc抗体陽性、1名はHBs抗体のみ陽性、その他の者は全て陰性）。（平成20年6月27日現在、残る23名の来訪なし。）

なお、当該患者のHBs抗原が陽転化する前（平成19年6月28日から11月28日）に輸血に使用された血液の供血者は56名であり、そのうち54名がその後献血又は再採血に協力いただいた（54名のHBV-DNAは全て陰性。1名はEIA法でHBs抗原及びHBc抗体陽性、1名はHBs抗体及びHBc抗体陽性、1名はHBs抗体のみ陽性、その他の者は全て陰性）。（平成20年6月27日現在、残る2名の来訪なし。）

（3）供血者個別NATの試験結果

輸血時の供血者106人の供血時の保管検体について、個別NATを実施したところ、全て陰性であった。

4 今後の対応

- (1) 平成19年6月28日から11月28日輸血の56人の供血者のうち、残る供血者2名の再献血・検査にかかるフォローを行う。
- (2) 血液の安全対策の推進
「輸血医療の安全確保のための総合対策」を着実に実施する。

輸血用血液製剤でHBV（B型肝炎ウイルス）感染が疑われた事例 （5月14日報告）について

1 経緯

平成20年5月14日、日本赤十字社から輸血（赤血球濃厚液）によるHBV感染の疑い事例で患者が死亡した症例の報告があった。

2 事例

60歳代の女性。原疾患は頸動脈狭窄。平成20年1月17日から18日にかけて、輸血（赤血球濃厚液合計3単位（2単位1本、1単位1本））を受ける。

輸血前の血液検査ではHBs抗原検査陰性（平成19年11月12日）、HBs抗体検査陰性かつHBc抗体陰性（平成20年1月17日）であったが、輸血後の平成20年4月21日に、HBV-DNA陽性、HBs抗原検査陽性、HBe抗原検査陽性、HBc抗体検査陽性、IgM-HBc抗体陽性となった。同日、AST14、610、ALT7、700となり、3日後の4月24日、B型劇症肝炎にて死亡。輸血血液と感染症との因果関係ありとの担当医の見解である。

3 状況

（1）輸血された血液製剤について

①当該患者には2人の供血者から採血された赤血球濃厚液を輸血。

②当該製剤と同一供血者から製造された2本の新鮮凍結血漿は全て確保済み。

（2）2人の供血者について

2人の供血者のうち、再来された方はいない。

（3）供血者個別NATの試験結果

輸血時の供血者2人の供血時の保管検体について個別NATを実施したところ、1本HBV-DNA（-）、1本HBV-DNA（+）であった。

（4）遺伝子の相同性の比較

患者検体と献血者検体（HBV陽性保管検体）とでPreS/S領域を含むP領域前半部の1550bpの塩基配列を比較したところ、献血者検体で4箇所塩基の混在があり、混在箇所では患者検体でそのうちの1塩基が存在していた。その他の箇所は全て一致した。献血者と患者のHBVはGenotype Bで塩基配列からSubtypeはadwと推定した。

4 今後の対応

（1）血液の安全対策の推進

「輸血医療の安全確保のための総合対策」を着実に実施する。

輸血用血液製剤でC型肝炎が疑われた事例 (2月15報告)について

1 経緯等

平成18年2月15日、日本赤十字社から輸血(赤血球濃厚液)によるHCV感染の疑いの症例の報告があった。その後、当該症例の死亡が確認され、日本赤十字社から3月8日に追加報告があったものである。

2 事例

70歳代の男性。原疾患は血液腫瘍。平成17年8月13日から平成18年1月30日までの間に、輸血(濃厚血小板液10単位47本、赤血球濃厚液2単位21本、新鮮凍結血漿5単位7本、同2単位4本、同1単位2本)を実施。患者は、2月19日に急性循環不全により死亡。患者の輸血前(8月12日)のHCV抗体検査は陰性であったが、本年1月30日にHCVコア抗原の陽性が確認され、2月14日のAST/ALTは67/192であった。

3 状況

(1) 輸血された輸血用製剤について

- ・ 当該患者には、81人の供血者から採血された赤血球製剤、血小板製剤及び新鮮凍結血漿を輸血。
- ・ 当該製剤と同一供血者から製造された70本の原料血漿のうち67本は確保・廃棄済み(3本は使用済み)。新鮮凍結血漿は、14本製造で11本確保済み(3本は医療機関供給済み)。赤血球製剤6本は医療機関供給済み。

(2) 検体検査の状況

- ・ 保管検体81本のHCV個別NATはすべて陰性。
- ・ 供血者81人中78人が献血に再来又は再採血し、HCV関連検査は陰性であった(平成20年6月27日現在、残る3人のその後の来訪なし)。

(3) 患者検体の調査

- ・ 輸血後の検体でHCV-RNA陽性が確認された。

(4) 担当医の見解

- ・ C型肝炎が死期を早めたと思われるが、輸血がC型肝炎の原因であるとの証明はされていないとのこと。

(5) 併用薬等

- ・ 当該患者は、輸血と同時期に乾燥アンチトロンビン、乾燥スルホ化グロブリン、人血清アルブミンを併用していた。

4 今後の対応

- (1) 今後、遡及調査ガイドラインの徹底を進める。
- (2) 再来していない供血者3人のフォローアップを引き続き行う。

輸血用血液製剤で細菌感染が疑われた事例 (6月5日報告)について

1 経緯

平成20年6月5日、日本赤十字社から輸血（赤血球濃厚液）による細菌感染の疑い事例で患者が死亡した症例の報告があった。

2 事例

90歳代の女性。原疾患は完全房室ブロック、溶血性貧血、胃潰瘍。平成20年5月30日から31日にかけて、輸血（赤血球濃厚液合計4単位（2単位2本））を受ける。5月31日、輸血前体温36.8℃、輸血中に発熱、悪寒あり、1/3程度で輸血中止。輸血中止後体温38.5℃。6月2日、敗血症にて死亡。院内にて実施の患者血液培養より *Klebsiella pneumoniae* を同定した。

3 状況

(1) 輸血された血液製剤について

当該患者には2人の供血者から採血された赤血球濃厚液を輸血。当該製剤と同一供血者から製造された2本の新鮮凍結血漿は全て確保済み。

(2) 検体検査の状況

被疑薬2本のうち1本については、同一採血番号の血漿（1本）で無菌試験を実施し、残る1本は、投与中止の当該製剤（1本）で細菌培養試験を実施。無菌試験結果は適合、細菌培養試験結果は陰性。

(3) 患者検体の調査

非溶血性副作用関連検査、抗血漿タンパク質抗体検査は未実施。

(4) 担当医の見解

無菌試験、細菌培養試験結果を受けて、担当医より「感染症と輸血血液との因果関係なしと考える」とのコメントあり。

4 今後の対応

今後、遡及調査ガイドラインの徹底や細菌を除去・不活化する方策の検討を進める。

平成20年度感染症報告事例のまとめ（前回報告分以降）について

- 1 平成20年5月3日報告分から20年7月1日までに報告（新規及び追加）があった感染症報告（疑い事例を含む。供血者からの情報により開始した遡及調査によるものを除く。）は、輸血用血液製剤25件である。

輸血用血液製剤の内訳は、	
(1) B型肝炎報告事例：	10
(2) C型肝炎報告事例：	6
(3) HIV感染症報告事例：	0
(4) その他の感染症報告事例：	9
- 2 B型肝炎報告事例
 - (1) 輸血前後に感染検査でHBs抗原（又はHBV-DNA）等が陽転した事例は6例（うち、輸血後NATで陰性又は輸血前後で陽性は0例）。
 - (2) 血液製剤を提供した献血者の保管検体の個別NAT陽性の事例は1例。
 - (3) 輸血後に死亡（原疾患又は他の原因による死亡を除く）したとの報告を受けた事例は1例（劇症化例含む。）である。
- 3 C型肝炎報告事例
 - (1) 輸血前後に抗体検査（又はHCV-RNA）等が陽転した事例は1例（うち、輸血後NATで陰性又は輸血前後で陽性は1例）。
 - (2) 使用した血液製剤を提供した献血者の保管検体の個別NAT陽性事例は0例。
 - (3) 輸血後に死亡（原疾患又は他の原因による死亡を除く）したとの報告を受けた事例は0例。
- 4 HIV報告事例
 - (1) 輸血後に抗体検査等が陽転した事例は0例。
 - (2) 使用した血液製剤を提供した献血者の保管検体の個別NAT陽性事例は0例。
 - (3) 輸血後に死亡（原疾患又は他の原因による死亡を除く）したとの報告を受けた事例は0例。
- 5 その他感染症報告事例
 - (1) 細菌等感染症報告事例において、血液製剤を提供した献血者の保管検体の無菌試験陽性事例は0例である。
 - 輸血後に死亡（原疾患又は他の原因による死亡を除く）したとの報告を受けた事例は1例。

※今回新規の個票として取り上げた症例にはカラムに黄色を付した。また、事前送付からの修正点・更新点は赤字で記載した。

日赤番号	識別番号	FAX受付日	報告受理日	一般名	患者性別	年齢	原疾患(丸め)	感染症名	投与年月	投与前検査(年月)	投与後検査(年月)	日赤投与前検査	日赤投与後検査	受血者個別NAT	献血者個別NAT	併用血液製剤等	備考	使用単位数	供血者再献血※	同一供血者製剤確保※	同一供血者製剤使用※	感染症等広帯	転帰	供血者発及の場合同供血者抗体、NAT(投与時点)	供血者発及の場合同供血者抗体、NAT(投与時点)	
				輸血によるHBV感染報告例(疑い例を含む。)																						
供血者陽性事例																										
3-08047	A-08000170	2008/5/14	2008/5/28	人赤血球濃厚液-LR	女	60	循環器疾患	B型肝炎	08/01	HBsAg(-) (07/11) HBsAb(-) HBcAb(-) (08/01)	HBsAg(-) HBV-DNA(+) HBsAg(+) HBsAb(+) HBeAg(+) HBcAb(-) IgM-HBcAb(+) (08/04)	HBV-DNA(-) (08/01)	HBV-DNA(+) (08/04)	陰性(輸血前) 陽性(輸血後)	1本はHBV-DNA(+)	保管検体2本について1本はHBV-DNA(-)、1本はHBV-DNA(+)		陽性と変わった当該輸血用血液と同一採血番号の製剤として、1本の新鮮凍結血漿-LRがあり、確保済み。	3単位	0/2	2本の新鮮凍結血漿-LRを製造。新鮮凍結血漿-LRはすべて確保済み。	-	重篤	死亡(B型肝炎)にて死亡。死亡し、死亡と本利との関連性あり。	患者検体と献血者検体(HBV陽性保管検体)とでPreS1/S領域を含むP領域の150bpの塩基配列を比較したところ、献血者検体で4箇所、保管検体で4箇所、塩基の置換があり、保管検体でそのうちの1塩基が存在した。その他の箇所はすべて一致した。献血者と患者のHBVウイルスはGenotype Bで塩基配列からSubtypeはatwと推定した。	
陽転事例																										
3-08049	A-08000172	2008/5/14	2008/5/28	人赤血球濃厚液-LR 人血小核濃厚液	女	60	血液腫瘍	B型肝炎	07/11 07/11-08/01	HBsAg(-) HBsAb(-) HBcAb(-) (07/05) HBsAg(-) (07/10)	HBV-DNA(-) HBsAg(-) HBsAb(-) HBcAb(-) (07/05) HBV-DNA(-) HBsAg(-) HBcAb(-) HBV-DNA(+) HBsAg(+) HBcAb(-) (07/06) HBV-DNA(-) HBsAg(-) HBcAb(-) (07/10)	HBV-DNA(-) HBsAg(-) HBsAb(-) HBcAb(-) (07/05) HBV-DNA(-) HBsAg(-) HBcAb(-) HBV-DNA(+) HBsAg(+) HBcAb(-) (07/06) HBV-DNA(-) HBsAg(-) HBcAb(-) (07/10)	HBV-DNA(-) HBsAg(-) HBsAb(-) HBcAb(-) (07/05) HBV-DNA(-) HBsAg(-) HBcAb(-) HBV-DNA(+) HBsAg(+) HBcAb(-) (07/06) HBV-DNA(-) HBsAg(-) HBcAb(-) (07/10)	陰性(輸血前) 陽性(輸血後)	保管検体2本 全部HBV-DNA(-)	保管検体2本 全部HBV-DNA(-)		4本(4)の原料血漿を製造。原料血漿はすべて確保済み。	4/4 2単位 30単位	4/4 2単位 30単位	不明	重篤				
3-08054	A-08000222	2008/6/2	2008/6/11	人血小核濃厚液(放射線照射)	男	80	血液疾患	B型肝炎	07/11-08/02	HBsAg(-) HBsAb(-) HBcAb(-) (07/11)	HBV-DNA(+) HBsAg(-) HBsAb(+) HBcAb(+) (08/05)	HBV-DNA(-) HBsAg(-) HBsAb(+) HBcAb(+) (07/11)	HBV-DNA(+) HBsAg(-) HBsAb(+) HBcAb(+) (08/05)	陰性(輸血前) 陽性(輸血後)	保管検体2本 全部HBV-DNA(-)	ポリエチレンングリコール処理人免疫グロブリン		60単位	6/6(HIV)関連検査(陰性)	-	非重篤	未回復				
3-08056	A-08000353	2008/6/10	2008/6/23	人赤血球濃厚液(放射線照射)-LR	女	80	血液腫瘍	B型肝炎	07/11	HBsAg(-) (06/5)	HBsAg(+) HBcAb(-) HBcAb(+) (08/05)	-	HBV-DNA(+) HBsAg(+) HBsAb(-) HBcAb(+) (08/06)	陽性(輸血後)	保管検体2本 全部HBV-DNA(-)			4単位	0/2	2本の新鮮凍結血漿-LRを製造。新鮮凍結血漿-LRはすべて確保済み。	-	非重篤	未回復			

日赤番号	識別番号	FAX受付日	報告受理日	一般名	患者性別	年齢	原疾患(丸め)	感染症名	投与年月	投与前検査(年月)	投与後検査(年月)	日赤投与前検査	日赤投与後検査	受血者個別NAT	献血者個別NAT	併用血液製剤等	備考	使用単位数	供血者再献血※	同一供血者製剤確保※	同一供血者製剤用※	感染症等広帯	転帰	供血者発達の場 合の供血者 供養体(抗原、 抗体、NAT)(投 与時点)	供血者発達の場 合の供血者 供養体(抗原、 抗体、NAT)(投 与時点)
3-08058	A-08000355	2008/6/12	2008/6/23	人血小球濃厚液(放射線照射)人赤血球濃厚液(放射線照射)-LR	女	50	血液腫瘍	B型肝炎	08/04-08/05 08/04-08/05	HBsAg(-) HBcAb(+) (08/03)	HBV-DNA(+) HBsAg(+) HBsAb(-) HBcAb(-) (08/05)	-	HBV-DNA(+) (08/04) HBV-DNA(+) (08/05)	陽性(輸血後)	保管抗体12本 全部HBV-NAT 実施予定	乾燥スル ホ化人免 疫グロブリン ポリエチレ ングリコー ル処理人 免疫グロブ リン		105単 位 4単位	0/12	12本の原料血漿を製造。原料血漿は全て確保済み。	-	非重篤	軽快		
3-08059	A-08000380	2008/6/13	2008/6/27	人血小球濃厚液(放射線照射)人赤血球濃厚液(放射線照射)-LR	男	60	血液疾患、血液腫瘍	B型肝炎	06/11-07/4 07/01	HBsAg(-) (06/08) HBsAg(-) (06/11)	HBV-DNA(+) HBsAg(+) HBsAb(-) HBcAb(-) (08/06)	-	HBV-DNA(+) (07/07) HBsAg(-) (07/08) HBV-DNA(+) (07/09) HBsAg(+) HBsAb(-) HBcAb(-) (08/06)	陽性(輸血後)	保管抗体12本 全部HBV-DNA(-)	原料血漿は全て使用済み。新鮮凍結血漿-LRは医療機関へ供給済み。	70単 位 2単位	6/8(H BV-関 連検査 陰性)	7本の原料血漿、1本の新鮮凍結血漿-LRを製造。	不明	重篤	不明			
輸血後NATで陰性又は輸血前後で陽性																									
3-08062	A-08000198	2008/5/20	2008/5/29	人血小球濃厚液LR	女	80	循環器疾患	B型肝炎	08/01	HBsAg(-) HBcAb(-) (07/12)	HBV-DNA(+) (08/05)	HBV-DNA(-) (08/01) HBsAg(-) HBcAb(-) (08/05)	陰性(輸血前) 陰性(輸血後)	保管抗体2本 全部HBV-DNA(-)			4単位	1/2 (HBV 関連検査 陰性)	2本の原料血漿を製造。原料血漿は全て確保済み。	-	非重篤	未回復			
3-08067	A-08000354	2008/6/10	2008/6/23	人血小球濃厚液(放射線照射)-LR	女	60	外傷・整形外科的疾患	B型肝炎	08/02	HBsAg(-) (07/12) HBsAb(-) HBcAb(-) (08/02)	HBV-DNA(+) (08/06)	HBV-DNA(-) (08/02) HBsAg(-) HBsAb(-) HBcAb(-) (08/02)	陰性(輸血前) 陰性(輸血後)	保管抗体4本 全部HBV-DNA(-)	加熱人血漿7.5ml		8単位	1/4(H BV-関 連検査 陰性)	4本の新鮮凍結血漿-LRを製造。新鮮凍結血漿-LRは全て確保済み。	-	非重篤	不明			
陽転未確認事例																									
3-08061	A-08000382	2008/6/16	2008/6/27	新鮮凍結人血漿-LR人赤血球濃厚液(放射線照射)-LR	男	50	外傷・整形外科的疾患	B型肝炎	07/10 07/10	HBsAg(-) (07/10)	HBsAg(+) HBcAb(+) IgM-HBcAb(+) (08/06)	調査中	HBV関連検査実施予定	保管抗体33本 全部HBV-NAT 実施予定			62単 位 4単位	17/33	調査中	調査中	重篤	未回復			
3-08067		2008/6/27		人血小球濃厚液	男	80	血液疾患	B型肝炎	05/08-12	HBsAg(-) (05/08)	HBsAg(+) HBsAb(+) HBcAb(+) HBsAg(+) HBcAb(+) (08/06)	調査中	HBV関連検査実施予定	保管抗体6本 全部HBV-NAT 実施予定			12単 位	調査中	調査中	非重篤	不明				
輸血によるHCV感染報告例(疑い例を含む。)																									
供血者陽性事例																									

日赤番号	識別番号	FAX受付日	報告受理日	報告受理日	一般名	患者性別	年齢	原疾患(丸め)	感染症名	投与年月	投与前検査(年月)	投与後検査(年月)	日赤投与前検査	日赤投与後検査	受血者個別NAT	献血者個別NAT	併用血液製剤等	備考	使用単位数	供血者再献血※	供血者同一供血者確保※	同一供血者製剤用※	感染症等広帯	転帰	供血者発及の場 合の供血者 者保管検 体(抗原、 抗体、 NAT)(投 与時点)	供血者発及の場 合の供血者 者保管検 体(抗原、 抗体、 NAT)(投 与時点)
	(該当症例なし)																									
	陽転事例																									
	(該当症例なし)																									
輸血後NATで陰性又は輸血前後で陽性																										
3-08050	A-08000196	2008/5/16	2008/5/29	2008/02/03	人赤血球濃厚液(放射線照射)-LR	女	80	腎・泌尿器系疾患	C型肝炎	08/02/03	HCVコアAg(-)(08/02)	HCVコアAg(+)(08/05)	HCV-RNA(+)(08/02)	HCV-RNA(+)(08/05)	陽性(輸血前)	保管検体7本全部HCV-RNA(-)			14単位	0/7	7本の原料血漿を製造。原料血漿は全て確保済み。	-	非重篤	未回復		
3-08062	A-08000383	2008/6/18	2008/6/27	08/03	人赤血球濃厚液-LR	男	60	消化器腫瘍	C型肝炎	08/03	HCV-Ab(-)(08/02)	HCV-Ab(-)(08/06)	HCV-RNA(+)(08/03)	HCV-RNA(+)(08/06)	陽性(輸血前)	保管検体3本全部HCV-RNA(-)	乾燥凍結人アンプルロンペン3		4単位	1/3(HC)V関連検査陰性	3本の原料血漿を製造。原料血漿は全て確保済み。	-	重篤	軽快		
陽転未確認事例																										
3-08064	A-08000390	2008/6/23	2008/7/3	07/03	人赤血球濃厚液(放射線照射)-LR 新鮮凍結人血漿	男	60	循環器疾患	C型肝炎	07/03	HCV-Ab(-)(07/03)	HCV-RNA(+) Genotype 1b HCV-Ab(+)(08/04)	-	調査中	HCV関連検査実施予定	保管検体7本についてHCV-NAT実施予定			4単位	5/7	調査中	調査中	非重篤	未回復		
3-08065	A-08000391	2008/6/24	2008/7/3	06/02	人赤血球濃厚液(放射線照射)	女	60	免疫系疾患	C型肝炎	06/02	HCV-Ab(-)(06/02)	HCV-Ab(+)(08/04)	-	調査中	-	保管検体2本全部HCV-RNA(-)			2単位	1/2(HC)V関連検査陰性	2本の原料血漿を製造。	原料血漿は全て使用済み。	非重篤	不明		
3-08066		2008/6/27		07/12	新鮮凍結人血漿-LR 人血小粒濃厚液	男	70	循環器疾患	C型肝炎	07/12	HCV-Ab(-)(07/11) HCV-Ab(-)(07/12)	HCV-Ab(+)(08/06)	調査中	調査中	HCV関連検査実施予定	保管検体6本についてHCV-NAT実施予定			10単位 6単位 10単位	4/6(HC)V関連検査陰性	3本の原料血漿、1本の新鮮凍結血漿-LRを製造。原料血漿は使用の有無を調査中。新鮮凍結血漿-LRは確保済み。	調査中	非重篤	調査中		
3-08068		2008/6/30		08/05	人血小粒濃厚液(放射線照射)	男	50	血液腫瘍	C型肝炎	08/05	HCV-Ab(-)(08/02) HCV-Ab(-)(08/02)	HCV-Ab(-)(08/06) HCV-RNA(+)(08/06) HCV-Ab(-)(08/06)	調査中	調査中	HCV関連検査実施予定	保管検体1本についてHCV-NAT実施予定			10単位	0/1	1本の原料血漿を製造。原料血漿は使用の有無を調査中。	調査中	重篤	未回復		
	(該当症例なし)																									
輸血によるその他ウイルス感染報告例(疑い例を含む。)																										
輸血による細菌等感染報告例(疑い例を含む。)																										

日赤番号	識別番号	FAX受付日	報告受領日	一般名	患者性別	年齢	原疾患(丸め)	感染症名	投与年月	投与前検査(年月)	日赤投与前検査	日赤投与後検査	受血者個別NAT	献血者個別NAT	併用血液製剤等	備考	使用単位数	供血者再献血※	同一供血者製剤確保※	同一供血者製剤使用※	感染症等広帯	転帰	供血者発及の場 合の供血者 体(抗原、 抗体、 NAT)(投 与時点)	供血者発及の場 合の供血者 体(抗原、 抗体、 NAT)(投 与時点)
3-08043	A-08000123	2008/5/8	2008/5/20	人血小粒濃厚液(放射線照射)	男	70	血液疾患	細菌感染	08/05	輸血開始後35分でBP95/45、SaO2 93% 40分後BP 83/45 SaO2 93~95% 院内にて患瓶の患者血液培養は陰性	-	-	非溶血性副作用 用関連検査実施 抗血漿タンパク質抗体検査:抗ヒトH7α及び抗ヒトH7β(輸血前)血漿タンパク質欠損検査:欠損なし	投与中止の当該製剤(1本)による細菌培養試験を実施。陰性。		被疑薬:採血4日目の照射濃厚血小粒(1本)本症例は2008年5月2日に副作用名「ショック」として情報入手し、30日報告の準備を進めていたが、5月7日に細菌感染も疑われるので関連項目を追加情報入手のため、感染症発症例として報告。当医より細菌感染と輸血液との因果関係なしと考える。このコメントが得られた。	10単位	-	1本の原料血漿を製造。原料血漿は確保済み。	-	回復	非重篤	回復	
3-08044	A-08000124	2008/5/8	2008/5/20	HILA(放射線照射)	男	80	血液疾患	細菌感染	08/05	輸血開始後50分で、全身性荨麻疹出現。輸血中止。患者血液培養は未実施。 院内にて患者エントキニン検査実施。陰性。	-	-	非溶血性副作用 用関連検査実施 抗血漿タンパク質抗体検査:陰性 血漿タンパク質欠損検査:欠損なし	投与中止の当該製剤(1本)による細菌培養試験を実施。陰性。		被疑薬:採血4日目の照射濃厚血小粒(1本)副検査結果を受けて、担当医より細菌感染と輸血液との因果関係なしと考える。このコメントが得られた。	10単位	-	1本の原料血漿を製造。原料血漿は確保済み。	-	回復	非重篤	回復	
3-08045	A-08000125	2008/5/8	2008/5/20	人赤血球濃厚液(放射線照射)-LR	男	70	呼吸器腫瘍	細菌感染	08/05	輸血開始後1時間で、発熱37.8℃→40℃ BP 140mmHg→210mmHg P 70/min→134/min 院内にて患者血液培養実施。Bacillus cereusを同定。	-	-	非溶血性副作用 用関連検査実施 抗血漿タンパク質抗体検査:陰性 血漿タンパク質欠損検査:欠損なし	投与中止の当該製剤(1本)による細菌培養試験を実施。陰性。		被疑薬:採血13日目の照射赤血球濃厚液-LR(1本) 当医より副作用、感染症と輸血液との因果関係なしと考える。このコメントが得られた。	1単位	-	1本の原料血漿を製造。原料血漿は確保済み。	-	軽快	非重篤	回復	
3-08046	A-08000189	2008/5/14	2008/5/28	人赤血球濃厚液-LR	女	60	腎・泌尿器系腫瘍	細菌感染	08/05	輸血後、発熱38.8℃→39.2℃ 寒栗、血圧若下低下、頻脈。 院内にて患者血液培養実施。陰性菌を検出。菌の同定できず。当該製剤のセグメントチューブを用いた血液培養は陰性。	-	-	非溶血性副作用 用関連検査実施 抗血漿タンパク質抗体検査:陰性 血漿タンパク質欠損検査:欠損なし	投与中止の当該製剤(1本)による細菌培養試験を実施。陰性。		被疑薬:採血18日目の赤血球濃厚液-LR(1本) 2008年5月12日に副作用名「寒栗」として情報入手し、30日報告の準備を進めていたが、5月13日に患者血液培養より細菌が検出されたとし、細菌感染も疑われるとの担当医の見解が得られたため、感染症発症例として報告。当医より副作用、感染症と輸血液との因果関係なしと考える。このコメントが得られた。	1単位	-	1本の原料血漿を製造。原料血漿は確保済み。	-	重篤	回復		

日赤番号	識別番号	FAX受付日	報告受理日	一般名	患者性別	年齢	原疾患(丸め)	感染症名	投与年月	投与前検査(年月)	投与後検査	日赤投与前検査	日赤投与後検査	受血者個別NAT	献血者個別NAT	併用血液製剤等	備考	使用単位数	供血者再献血※	同一供血者製剤確保※	同一供血者製剤使用※	感染症等広帯	転帰	供血者発達の場及の供血者供養候体(抗原、抗体、NAT)(投与時点)	供血者発達の場及の供血者供養候体(抗原、抗体、NAT)(投与時点)
3-08048	A-08000171	2008/5/14	2008/5/28	人赤血球濃厚液(放射線照射)-LR	男	20	血液腫瘍	細菌感染	08/05	—	—	—	—	非溶血性副作用関連検査実施。抗血漿タンパク質抗体検査、陰性。抗血漿タンパク質抗体検査、陰性。質次精検査：欠損なし。	投与中止の当該製剤(1本)による細菌培養試験を実施。陰性。	—	被疑薬：採血9日目の照射赤血球濃厚液-LR(1本) 調査結果を受けて、担当医師より細菌感染と輸血血液との因果関係なしと考える。どのコメントが得られた。	2単位	—	1本の原料血漿を製造。原料血漿は確保済み。	—	非重篤	回復		
3-08051	A-08000197	2008/5/19	2008/5/29	人赤血球濃厚液(放射線照射)-LR 人赤血球濃厚液-LR	男	70	肝・胆・膵腫瘍	細菌感染	08/05	—	—	—	—	非溶血性副作用関連検査実施。抗血漿タンパク質抗体検査、陰性。抗血漿タンパク質抗体検査、欠損なし。	投与中止の当該製剤(1本)による細菌培養試験を実施。陰性。	—	被疑薬：採血10日目の赤血球濃厚液-LR(1本) 照射赤血球濃厚液-LR(1本) 調査結果を受けて、担当医師より細菌感染と輸血血液との因果関係なしと考える。どのコメントが得られた。	2単位 2単位	—	2本の原料血漿を製造。原料血漿は全て確保済み。	—	非重篤	軽快		
3-08055	A-08000283	2008/6/5	2008/6/16	人赤血球濃厚液(放射線照射)-LR	女	90	循環器疾患・消化器疾患・血液疾患	細菌感染	08/05	BT36.8℃→38.5℃ 院内にて患者血液培養実施、Klebsiella pneumoniaeを同定。	—	—	—	—	被疑薬2本のうち、1本については同一採血番号の血漿(1本)で無菌試験を実施。適合。 残る1本は投与中止の当該製剤(1本)による細菌培養試験を実施。陰性。	被疑薬2本のうち、1本については同一採血番号の血漿(1本)で無菌試験を実施。適合。 残る1本は投与中止の当該製剤(1本)による細菌培養試験を実施。陰性。	4単位	—	2本の新鮮凍結血漿血漿-LRを製造。新鮮凍結血漿血漿-LRは全て確保済み。	—	重篤	死亡(敗血症にて死亡、却接なし) *死亡と本剤との関連性不明(担当見解)			
3-08060	A-08000381	2008/6/13	2008/6/27	人血小板濃厚液(放射線照射)	男	60	血液疾患	細菌感染	08/06	BT38.8℃ 患者血培養は未実施。	—	—	—	非溶血性副作用関連検査実施予定。	投与中止の当該製剤(1本)による細菌培養試験を実施予定。	—	被疑薬：採血3日目の照射濃厚血小板	10単位	—	調査中	調査中	重篤	回復		
3-08063	A-08000389	2008/6/23	2008/7/3	人血小板濃厚液	女	40	血液腫瘍	細菌感染	08/06	BT38.8℃ 院内にて患者血液培養実施。陰性。	—	—	—	非溶血性副作用関連検査実施予定。	使用済みバッグによる細菌培養試験を実施予定。	—	被疑薬：採血3日目の濃厚血小板	10単位	—	調査中	調査中	非重篤	未回復		